審査の要点（審査員の立場から）

正 員 三木 一郎*

The Point of Evaluation for Accreditation of Engineering Programs from Evaluator Viewpoint

Ichiro Miki*, Member

This report mainly describes the role of team chair and evaluator, the practical campus visit activities, and the evaluation content from the evaluator viewpoint.

キーワード：審査長、審査員、審査員の役割、基準、審査内容

Keywords : team chair, program evaluator, role of evaluator, criteria, evaluation content

1. はじめに

2001 年度の試行審査に審査長として参加し、実地審査の実際を経験した。試行であり、認定の可否の模擬判定結果を高等教育機関（受審校）には通知しないが、認定基準にしたがって公正な審査と判断を行った。2001 年度は、電気学会では 6 プログラムについて試行審査を行い、また、電気・電子・情報通信分野ではないが、既に 3 プログラムが認定されている。今後、本格的に本審査が開始されるようになると、認定過程や認定結果について審査側、受審側双方がこれまで以上に敏感になることが十分予想される。

審査を行うためには、審査員が必要になる。審査員として審査を実際に経験することは、自校が審査を受ける際には学内指導者として中心的な役割を果たすことができ、自プログラム認定に向けて貢献できると共に、我が国の技術者教育にも寄与することとなる。審査員になるためには、いくつかの条件があり、現状では審査員が不足すると考えられる。電気学会では、今後も審査員および学内指導者養成のための研修会を随時開催する予定であり、積極的な参加を要請したい。

本稿では、審査を行った経験をもとに、審査員の立場から主に実地審査の実際と審査における留意点などについて述べることにする。

2. 審査における役割および審査の開始

審査を実施する場合、審査長と審査員あるいはオブザーバとでは果たさなければならない役割に違いがでてくる。審査を行うこと自体は基本的に同じであるが、審査長は、審査前の準備と審査後の報告書作成を行うことなどが求め

られるため、かなりの時間を費やさなければならない。そこで、始めに実地審査以外の役割について審査長と審査員に分けて、その概略を示すことにする。

〈2・1〉 審査長の役割 審査長は、まず実地審査日程について受審校および審査員と協議し決定する必要がある。日程が決まると、以下に示す主な項目について、順次進めることになる。

（1） 審査スケジュールの立案、調整、連絡。

（2） 自己点検書などが審査員に届いていることを確認し、プログラム点検書の作成準備を促す。また、期日（実地審査日の 2 週間前）までにそのプログラム点検書を審査長に送付することを依頼する。

（3） 追加資料等が必要か否か審査員にたずね、受審校に送付あるいは準備を依頼する。

（4） 審査員側が面談を希望する教職員、学生およびプログラム修了生を受審校に依頼し、審査員の面談担当などを決定する。

（5） 学生に対する合格の最低レベルが判定できる審査方法について審査員と協議する。また、国際的に認知される最低レベルについて審査員と協議する。

（6） ホテルや会議室、使用する機器などを受審校に依頼する。

（7） 受審校および審査員に日程やスケジュールなどについて最終確認を行う。

以上のことを精力的に進め、実地審査前日や当日の会議、そして実地審査における進行役を務めなければならない。実地審査後は、1 次および 2 次報告書を審査員の協力のもとで作成することが求められる。

〈2・2〉 審査員およびオブザーバの役割 審査員は自己点検書や添付資料等に基づき審査を行い、プログラム点検書を作成することが主な役割であるが、実地審査前から報告書作成までの期間、審査長からの依頼や要請に協力す

* 明治大学工学部
〒214-8571 川崎市多摩区東三田 1-1-1
School of Science and Technology, Meiji University
1-1-1 Higashimita, Tama-ku, Kawasaki 214-8571

ることが必要である。

オブザーバは、試行審査では審査員と全く同じ役割を担って審査に参加していただいているが、本審査では、審査長から求められた場合に限り、意見を述べるができる。

次に、審査を行うに際し、審査員として何から手をつけたらよいか考えてみたい。審査員は全員研修を受けているが、これを受講しただけでは実際の審査はできない。受審校より自己点検書および添付資料等が送付されてきた時点より審査が開始されるわけであるが、送付されてくるものは一般に非常に厚い書類の束である。これを前にしてまず多くの審査員は茫然とするにちがいない。審査の基本は、何といっても認定基準の理解に始まる。これを繰り返し読み、さらに実地審査の手引きや自己点検書作成の手引きを読むとかなり全体像が明らかになってくる。その上で、自己点検書および添付資料に取りかかるしかない。書類の審査中にも認定基準や手引きを頻繁に参照し、基準や審査の方法に間違いがないように十分な配慮をすることが肝要である。審査員は、認定基準や認定および審査方法などについて疑問がある場合、審査長にたずねることになっており、審査長はこれらのことを理解するために相当な時間を割かねばならない。

以上より、審査長、審査員の役割等についてはある程度ご理解いただけると思うが、審査長のロードはかなりハードであり、審査員の積極的な協力が不可欠である。

3. 審査の実際

前述のように、自己点検書等が手元に届いた時点から審査は事実上開始されるわけであり、点検書の内容に関して疑問や追加の資料等がある場合には、審査長を通して受審校に請求することができる。あるいは予め受審校に準備をお願いすることができる。実地審査のやり方はいくつかのパターンがあり、一概にどの方法がよいとはいえず、受審校の場所、審査員の居所、交通の利便性などを考慮して決めなければならない。ここでは、我々が実施した方法を紹介する。

審査員はオブザーバを含めて6人であり、実地審査前日の夕刻にホテルに集合し、午後4時から夕食1時間をはさみ10時10分まで、約5時間を費やして会議を行った。ここで行った主な事柄は以下の通りである。

(1) 各自のプログラム点検書を基に審査結果およびその根拠などを説明し、誤解して審査していないことなどについても確認する。

(2) 質問の内容を整理し、大学側に提示を要請する資料や面談に関する項目のリストを作成する。

(3) 国際的に認知されるレベルと学生に対する合格の最低レベル等について最終的な議論を行う。

(4) 総括報告原案に関する意見を調整する。

翌日は、9時にホテルを出発し、受審校で挨拶や打ち合わせ等を済ませた後、10時前から審査を開始した。前日整理した質問事項などに沿って、審査長が質問を行い、さ

らに各審査員およびオブザーバが各自の懸案事項について質問を行った。回答は、主に学科長、プログラム責任者が行い、必要に応じて他の教授および事務局職員が回答した。11時40分から、約1時間で大学側が準備した各種書類等について審査を行い、各自プログラム点検書に審査結果を記入した。

昼食の後、基準について審査を続行し、午後2時20分に書類および口頭による審査を終了し、施設見学に移った。見学場所は、学科の実験室、コンピュータ室、教員の実験室、LL教室、講義室、図書館、学生情報室、売店、食堂、体育館、トレーニングセンターなどである。4時から、審査員側が3グループに分かれ、教職員との面談を行い、5時半に1日目の審査を終了した。

夕食、休憩の後、午後8時30分より会議を開始し、委員各自の審査結果とその根拠について説明した。その後、プログラム点検書と総括報告文の原案を作成した。その他の審議を行い、11時終了。

2日目は、同じく9時にホテルを出発し、9時半より1時間学生との面談を行い、10時45分から2時間かけて審査員全員で最終審査結果について審議し、総括報告書を作成した。昼食の後、実地審査最終面談を開始し、総括報告書を朗読、プログラム点検書を受審校に手渡しして実地審査を終了した。なお、学科長に対し、プログラム点検書に記載の事項や総括報告に対して事実関係等の誤認などがある場合には、2週間以内にその修正を文書で要請できることを口頭で伝達した。

4. 審査における留意点と審査内容について

〈4・1〉 審査およびその準備 質問事項や追加資料等があれば、予め受審校に通知し回答を得ておくことと実地審査をスムーズに進めることができる。また、審査員の分担などを含め、綿密なスケジュールを立てておくことが制約時間内に実地審査を終了させる条件の一つである。当然のことながら、審査基準について十分な検討・学習をしておくことも条件である。

実地審査前日は、可能ならば早く集合し、その日に受審校で審査を開始することが望ましいが、無理な場合には審査員が疲れていないこの日にできるだけ多くの事項を審議、調整、準備しておくことが必要である。実地審査は、精神的にも体力的にもハードであり、十分体調を整えておく必要があるが、実地審査中、午前、午後に各々10分程度の休憩をとるスケジュールをとるだけでも疲労は緩和される。

審査チームは、少なくとも2回は長時間の会議を行うが、会議室を関係書類がそろっている受審校内に設定できれば最も都合がよい。夜遅くまで会議が続くことになるので、夕食のことを含め受審校とよく相談しておくことが望ましい。ホテルの会議室を使用すると高額となる。

学生との面談は、集団で実施した方が友好的な雰囲気の中で真実を聞くことができる。また、可能であれば、面談

する学生の情報を予め得ておけば面談が実施しやすい。しかし、プライバシーの問題もあるので、学生の了解が必要であろう。

その他、会議に必要なものとして、ノートパソコン（予備を含め2台持参）、コピー機、延長コード、プロジェクタ、スクリーン、プリンタ（持参）などが必要になるので、受審校と調整をしておかねばならない。

〈4・2〉 審査内容 ここでは、試行審査の結果より判断し、審査員から見てプログラム側にとって満足することが比較的難しいと思われる基準について挙げることにする。

- 基準3 3.2（1）カリキュラムの設計と学習・教育目標への対応の公開
- 基準3 3.3（3）教員の教育貢献に対する評価方法の公開と実施
- 基準6 6.2（1）当該教育プログラムを改善してゆくための具体的かつ継続的な方策の立案と実施
- 基準5（4）学習・教育目標の総合的な達成度を判定する評価基準を満たした学生のみを当該教育プログラムの修了生としていること

最後を除いて、プログラム側で創意工夫が必要となる項

目であり、例題もないため困難があったと思われる。しかし、現実にはこれらをほぼ満足するプログラムがあり、今後それらを参考にしつつ、さらにより方法が生まれることが望ましい。

5. まとめ

審査員の立場から実地審査の実際と審査における留意点などについて述べた。審査員になるには、始めに述べたように年令等その他の条件があるが、決して難しいものではない。多くの方々のご参加を再度お願いしたい。本稿が、今後の実地審査の参考になれば幸いである。

（平成14年9月20日受付）

三 木 一 郎

（正員） 1950年9月20日生。1978年3月明治大学大学院博士課程単位取得退学。同年同大学工学部助手。専任講師、助教授を経て1990年4月同理工学部教授、現在に至る。主として、モータ制御に関する研究に従事。1987年3月～1988年3月米国ケンタッキー大学、カリフォルニア大学デイビス校において客員研究員。工学博士。IEEE会員。